慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メディア・イベントとメディア言説 (一) : 英国ホロコースト・メモリアル・デイを一事例として
Sub Title	Media event and media discourse : a case study of Holocaust Memorial Day in U.K. (1)
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2003
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.76, No.5 (2003. 5) ,p.1- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20030528-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メディア・イベントとメディア言説（一）

――英国ホロコースト・メモリアル・デイを一事例として――

大石　裕

一　はじめに
二　ホロコーストをめぐる知識と記憶
（1）言葉の権力作用
（2）知識の権力作用
（3）イデオロギーとしての歴史的知識
（4）集合的記憶と集合的アイデンティティ
（5）集合的記憶の制度化
（6）記憶される場所とメディア権力の隠れた次元
（7）場所の物語と記憶をめぐる抗争……（以上本号）
三　メディア・イベント、国家イベントとしてのホロコースト・メモリアル・デイ
（1）ホロコースト・メモリアル（リメンバランス）・デイの制定
（2）現実の社会的構築・構成とメディア言説
（3）ホロコースト・メモリアル・デイの制定をめぐるメディア言説
（4）ホロコースト・メモリアル・デイの式典：国家儀式・国家イベントとして
（5）国家儀式としてのホロコースト・メモリアル・デイに対する評価：メディア言説を中心に
（6）ホロコースト・メモリアル・デイの式典：メディア・イベントとして
四　今後の研究課題――メディア儀礼の観点を中心に――
……（以上七六巻六号）

一　はじめに

イギリスのブレア政権は、一月二七日をホロコースト・メモリアル・デイと定め、二〇〇一年にロンドンのウエストミンスター宮殿内にあるウエストミンスター・ホールにおいて第一回目の式典を開催した。一月二七日は、一九四五年にポーランドのアウシュヴィッツとビルケナウにあったユダヤ人の強制収容所がソ連軍によって解放された日である。この式典は、政府主導で計画され、挙行されたことから国家イベントと見なすことができる。また、式典の模様は英国放送協会（BBC）によって中継され、また式典自体が中継されることを前提に計画されたと考えられることから、メディア・イベントとして捉えることもできる。

本稿は、この式典を中心にイギリスの第一回ホロコースト・メモリアル・デイに関して、いくつかの角度から考察することを目的とする。第一に、この式典が実施される動機となった、現代社会では支配的な反ホロコースト、反ナチズムという見解に関して、主に歴史（的事件）をめぐる言葉（言語）、記憶、知識、場所に関する既存研究を参照しながら検討する。その際の重要な用語・概念は、「現実」の社会的構築・構成である。これは、イギリスのホロコースト・メモリアル・デイに関する分析を行うための準備作業である。第二に、主にマス・コミュニケーション研究の領域で論じられてきたメディア言説に関する研究成果を参照しながら、イギリス社会におけるホロコースト・メモリアル・デイ制定に至る論議について、マス・メディア報道などを素材にして考察を加える。第三に、第一回目のホロコースト・メモリアル・デイの式典に関して、それを前述したように国家イベント、ないしはメディア・イベントと捉え、やはりマス・メディア報道を中心に検討する。その際、主に儀礼と伝統、そしてメディア・イベントに関する従来の研究の展開を踏まえつつも、それらに修正を加えながら考察を行う。そこでは、この式典において、明示的ないしは黙示的に提示された様々な意味に関して、権力作用の側面を

中心に分析を試みる。

二　ホロコーストをめぐる知識と記憶

（1）言葉の権力作用

ドイツ・ナチズムが「第三帝国の言語」を用いることにより、人々を操作し、動員したことは広く知られている。例えば、クレムペラーは、「ナチズムはひとつひとつの言葉、言いまわし、文形を通じて大衆の血と肉の中に自然と入りこんでしまっているのである。それは百万回も繰り返されて大衆につめこまれ、機械的に無意識に受け取られたのである」（クレムペラー［一九四九＝一九七四］、二〇頁）と述べている。またミューラーは、同様の問題関心から、ナチズム社会では「個人は、画一なものへと変換されて、民族精神といわれた知覚のできない ある根元から指導されるところの、一つの過程の部分に化してしまった」（ミューラー［一九七五＝一九七八］、四三頁）と鋭く批判する。これらの見解は、ナチズムによる言葉を通じたドイツ社会に対する統制手法の一端を示すものである。

確かにナチズム社会のように、コミュニケーション過程が閉鎖的かつ抑圧的な性格を強く帯びると、近代社会においては状況を意味づけ、定義する作業の中心に位置するマス・コミュニケーション過程が歪曲され、世論操作や大衆動員の可能性が高まることになる。その結果、本来多様な可能性をもつはずの、人々が行うメッセージの解読作業の幅は著しく狭められてしまう。ところが、このメカニズムは程度の差はあれ、近代社会における合意形成過程においても作動すると捉えられるのであり、言葉の権力作用について検討する場合、そうした観点に立つことが重要となる。

「ホロコースト」という言葉

じつは、「ホロコースト」という歴史的出来事に関する意味づけや定義づけのメカニズムも、その例外ではない。第二次世界大戦後、ホロコーストという言葉は、ナチズムによるユダヤ人に対する残虐行為や虐殺行為と等置されるのが一般的になった。ホロコーストという言葉は、こうした行為に対するイメージと、それを実行したナチズムという政治体制に関するイメージを世界的に共有させることを促してきたと言える。もちろん、この出来事をホロコーストと呼び、ナチズムが採用した政策や手段を批判し、非難し続けることの重要性は誰も否定できない。また、ナチズム統制下のように、明示的に抑圧されたコミュニケーション過程において使用された言葉と、自由民主主義を標榜し、自由なコミュニケーションを制度的に保証している社会の中で使用される言葉とを同一視するのは適切ではない。

しかしその一方で、例えば現実の社会的構築や構成に関する諸研究を参照するならば、言葉を用いてある出来事を名づけるという行為それ自体に一種の権力作用が伴い、そうした作用が体制を超えて存在するという見解も成立する。そして、その種の見解は、関連する研究領域でこれまでかなりの影響力を有してきた。従って、ここではまず、ホロコーストをめぐる知識と記憶について具体的に論じるための準備作業として、言語（＝言葉）、知識、記憶の関連について考察を加えることにする。

最初に掲げておきたいのは、ナチズムによるユダヤ人などに対する虐殺行為をホロコーストと名づけることに関する次のような記述である。

「第二次世界大戦中、そして戦後しばらくの間、ヨーロッパに居住するユダヤ人に対する殺戮については、それを指し示す合意された単語は存在しなかった。……おそらく重要なのは、『ホロコースト』という単語が、第二次世界大戦

中に日本・イタリア・ドイツが行った破壊行為全体に対しても常に用いられ、その限りにおいて、ユダヤ人の悲惨な運命だけにこの単語が使用されたわけではない、という点である。」（Novick [1999], p. 20）

この指摘にあるように、ホロコーストとは言うまでもなく大量殺戮を意味する一つの単語であった。それがナチズムによるユダヤ人に対する虐殺行為と等置するという用法がしだいに定着することで、この虐殺行為は、他の類似の出来事との比較の中で、歴史的に特異な位置を占めるようになったのである。もちろん、五〇〇万とも六〇〇万とも言われるユダヤ人が、ナチズムによって計画的に虐殺されたという事実の重さは否定できない。しかし、同時に考慮されるべきは、やはりこの場合でも言葉によって出来事を名づけるという過程の中に、人々の思考を枠づけるという作業が同時進行してきたという点である。そして、ここに言葉の有する権力的側面が見て取れるのである。

「名づけ」と「意味づけ」の権力作用

言葉による名づけの行為に必然的に伴うこの種の権力作用に関連して、かつてマンハイムは次のように論じた。

「単独の個人が、彼固有のものとみなされる話し方や思考様式を自力でつくりだせる状況は、ごく限られている。彼は自分が属している集団の言葉で話す。彼はその集団が思考する流儀に従って思考する。したがって、彼が自己の意のままにできるのは、ごくわずかの単語とその意味づけでしかない。」（マンハイム［一九三八＝一九七一］、九九頁）

同様の観点からエーデルマンは、状況の意味づけや定義づけの出発点に認知と言葉（そして身振り）との関係を据え、次のように述べている。

「認知というのは複雑である。なぜなら、認知はそもそも社会的なものであり、個人の頭の中だけにとどまらないからである。また、言葉と身振りは、『自己』を生み出すと同時に、人々の間で共有される意味を生み出すからである」

(Edelman [1977], p. 11)

これらの指摘は、人々が使用する言葉とその言葉が有する意味の背後に、諸個人が所属する集団が存在することを強調している。言葉は、文法的側面のみならず、状況の意味づけや定義づけという側面が社会的に共有されることによってその機能を果たす。社会的存在としての「自己」、ないしは社会の中の「個人」は、言葉の意味の他者との共有という過程を通じて、その個人が属する集団や社会と結びつくのである。すなわち、言葉の使用という行為は、一見個人的な行為のように見えるが、実際はすぐれて集団的、あるいは社会的行為として把握されうるのである。このように言葉は、集団ないしは社会レベルで共有されることを前提に機能しており、人々が言葉を用いて行う状況の意味づけ、あるいは定義づけという作業もその例外ではない。ここから、集団・社会レベルで行われる言葉を用いる出来事の名づけという作業が、その出来事の定義づけや意味づけという作業と同時並行的に進行し、そのことが人々の社会認識のレベルにおいて重大な権力的側面を有することが理解されるのである。

それに加え、エーデルマンは、政治的領域において使用される言語を「政治言語」と捉え、その機能について次のように論じている。

「……言葉は政治的舞台において統合的な働きをする。すなわち政治言語は、出来事を記述する手段として機能するだけでなく、それ自体が出来事の一部となるのである。というのも、言葉は出来事の意味を形作り、政治エリートや一般の人々が演じる政治的役割を形成するのに役立つからである。この意味で、言葉、出来事、そして自己認識は……互いに意味を規定しあうのである。」(*ibid*, p. 4)

このようにエーデルマンは、言葉がたんなる説明の用具にとどまらず、「現実」を生み出す機能を有する点に着目する。この指摘は、現実の社会的構築・構成過程における言葉の権力作用を考えるうえできわめて示唆に富

むものである。

バーガーとルックマンは、やはり言葉の権力作用について「ことばは記号体系として客観性という性格を備えている。私は私の外部に存在するひとつの事実性としてことばと出会い、ことばはその効力において私を強制する。ことばはそのパターンのなかへ私を強引に引き入れる」（バーガー＝ルックマン［一九六六＝一九七七］、六六頁）と述べる。そして、人々の言葉の獲得過程において働く権力作用について、「（言葉が：引用者）集団的な沈殿物の大きな塊の貯蔵所」であるがゆえに、概して「無批判的に獲得されうる」と論じている（同、一一九頁）。

以上のいくつかの見解から、言葉の権力的側面の前提には、言葉が社会の他の構成員と共有されるという点をあげられること、そして、社会化の過程で獲得される言葉、そして言葉の有する意味が、人々の外部に存在し、それゆえに言葉による状況の定義づけという行為そのものの中に、顕在的ないしは潜在的に権力が作用することが了解される。

従って、ナチズムによるユダヤ人などに対する大量殺戮行為という歴史的出来事についても、一般の人々は、その出来事をホロコーストという言葉によって名づけ、その言葉を社会的に共有することによって否定的に定義し、意味づけていると言える。それと同時に、ホロコーストという言葉は、たんに歴史的出来事を説明するだけでなく、説明することを通じて様々な行為を生み出し、「現実」を作りあげてきたと捉えられる。倫理的ないしは規範的観点からの論議を別にするならば、その際、大部分の人々はホロコーストという出来事に関しては既存の評価を受容するしかないことから、この過程においても言葉を通した権力が行使されていると考えられるのである。

（2）知識の権力作用

これまで見てきたように、出来事の定義づけや意味づけは、社会的に共有される言葉によって構築され、構成されている。そして、こうした定義づけや意味づけは歴史的経緯を経て体系化されることがある。ここではその集積体を「知識」と捉え、以下ホロコーストに関する知識の権力作用に関して考察してみる。

知識の制度化

ナチズムによる支配、あるいはホロコーストのような歴史的出来事を取り上げ、それについて論じる場合には、特定の信念や意見を伴うのが一般的である。そうした信念や意見をいだき、それを社会的に表明する際の拠点となる、あるいはその際に動員されるのが知識である。以下の見解は、意見や信念といった類語と比較しながら、知識の特徴づけを試みるものである。

「意見とは、評価を内包する信念であり、それは社会的に共有される価値や規範を基盤に下される判断を前提とする。他方、社会的かつ文化的な知識とは、社会的に共有された事実に基づく信念によって構成される。その種の信念は、社会的に認められた真実の基準に基づくものである。ここで言う真実の基準、ないしは証拠の基準となりうるのは、日常の常識、科学、宗教などである。」（van Dijk [1998], p. 34）。

ここでは知識は、社会的に共有された「事実」や「真実」に基づいて構成されるものとして位置づけられている。確かに、知識は客観性を志向し、その点に限って見れば、価値や規範といった社会や文化によって異なる基準をもとに形成される意見とは異なる。とはいえ、ここで「真実」や「証拠」の基準として、科学とともに常識や宗教も挙げられていることに注目すべきであろう。知識といえども、社会や文化に応じて異なることが当然視される基準（常識や宗教）に準拠しながら編集された「事実」や「真実」のうえに形成され、構成されていると見なされているのである（ここでは科学のイデオロギー的側面については、あえて問わない）。

このように知識には、科学と常識（あるいは宗教）という、一見すると相反する二つの基準が存在している。すなわち、一方において、知識は専門性の高い人々によって「客観的」に検証される「科学」の領域において存在する。その場合、知識は専門用語によって語られ、その領域では専門的知識が構成されている。ところが他方、そうした厳密性を欠く知識、換言すると一般の人々の間に広く行き渡っている常識（common sense）と深くかかわる知識も存在する。この種の「常識的な知識」は、「日常生活の常態的で自明的なルーティーンのなかで私が他者とともに共有している知識」（バーガー＝ルックマン［一九六六＝一九七七］、三九頁）として位置づけられている。ただし、科学的知識と常識的知識の間には連続性が認められることもあり、例えば、常識的知識には、専門的知識が編集（時には意図的あるいは非意図的に歪曲）され、動員されることによって、一般の人々の経験を枠づけるという側面が存在する。他方、常識的知識に対する疑問が生じ、それが科学的知識の再検証を促すこともある。

バーガーとルックマンは、ここで言う常識的な知識に焦点を合わせ、その作用について考察を加えた。彼らは、「社会についての知識は……対象化された社会的現実の理解という意味と、この現実をたえず創造しつづけるという意味において、実現化（realization）」（同書、一一四頁）という作用を担うものと考える。それに加えて、「この知識の体系もまた次の世代へと受け継がれていく。それは社会化の過程において客観的な真実として習得されていき、こうしてまた主観的な現実として内在化もされていく」（同書、一一五頁）とも述べている。このように、知識はたんに蓄積されるものではなく、「理解」「実現化」「継承」「習得」といった動態的な過程の中で生成し、変化していくものと捉えられる。

以上の点を踏まえ、次に知識という制度、ないしは知識の制度化という問題について若干検討してみる。ここで言う制度とは、「個人の認識、活動、相互作用、そして集団の諸関係を組織化し、管理し、普及させる」（van

Dijk [1998], p. 186）役割を担うものである。また制度は、「意味の体系」「行為の体系」「モノの体系」という、三つの異なるレベルの体系の総合体として把握されうる（盛山［一九九五］）。このうち、ここで検討する知識の権力作用と直接関連するのは「意味の体系」である。「意味の体系」とは、第一に、それ自身、内的な一定の秩序ある意味連関を構成し、第二に、行為の体系およびモノの体系に属する経験的諸現象を意味づけ、第三に、それらを統制する、という機能が備わっている（同、二四一頁）。逆から見れば、意味の体系は、行為の体系やモノの体系によって表象される。ここから知識とは、ある特定の行為やモノを意味づけ、統制する機能を担う、秩序ある意味連関として了解できよう。従って、「知識の制度化」とは、ある特定の行為やモノに関する意味連関の秩序化という動態的な過程を指し示すと言える。それゆえ、ホロコーストに関する知識の制度化とは、ホロコーストという歴史的出来事に関する意味連関の秩序化と捉えられるのである。

これらの見解を参照するならば、以下で論じるように、ホロコーストという言葉とそれに内包される知識の制度化は、人々に社会的かつ歴史的な出来事を理解させ、人々の意見や態度、さらには行為を拘束する機能を担ってきたと言える（同、二四五頁参照）。それと同時に、こうした作用がナチズムという全体主義体制と戦後の自由民主主義体制を対比させ、後者の優位性と正当性を人々に認識させ、それにかかわる秩序とそれに基づく体制を存続・発展させることの必要性に関する合意の形成に寄与してきたと捉えることもできる。そして、そうした意見や態度、さらに信念が世代を超えて継承され、知識の制度化は進展してきたのである。

「ホロコースト」に関する知識と物語

一般向けの概説書を見ると、ホロコーストとは、「ヨーロッパのユダヤ人を壊滅させようとしたナチの行為である。それは、一九三九年から一九四五年にかけて、行われた様々な大規模な虐殺（genocide）の一部であっ

た」（Bresheeth et.al. [2000], p. 3）と明確に定義されている。また、この概説書では、ナチズムに支配されたドイツ社会がユダヤ人対して行った差別行為が強化された状況と段階が次のように記され、ホロコーストに至った過程が簡略化されて描かれている（*ibid*, p. 24）。

第一段階――あなた達は、我々の中で、ユダヤ人として生活・生存する権利を持たない。
第二段階――あなた達は、我々の中で、生活・生存する権利を持たない。
第三段階――あなた達は、生活・生存する権利を持たない。

その一方、この時期のナチスの虐待による死者の数は次のように記されており、これを見るとユダヤ人に対する虐殺はナチズムによる残虐行為の中心に位置しながらも、その一部であったことがわかる。

ユダヤ人の犠牲者	五〇〇万から六〇〇万人
ソビエト捕虜の犠牲者	三〇〇万人以上
ソビエト民間人の犠牲者	二〇〇万人以上
ポーランド民間人の犠牲者	一〇〇万人以上
ユーゴスラビア民間人の犠牲者	一〇〇万人以上
精神的あるいは肉体的な障害者の犠牲者	七万人
ジプシーの犠牲者	二〇万人以上
政治犯の犠牲者	不　明

レジスタンス闘士の犠牲者　　不　明
国外追放による犠牲者　　不　明
同性愛者の犠牲者　　不　明

こうした記述や数字は、不明なものもいくつかあるが、ナチズムの残虐性を裏付ける重要な基礎資料であり、それに関する知識の基盤になるものである。そして、これらの記述や資料を見ると、ホロコーストがユダヤ人虐殺のみに限定され、それ故に歴史的出来事として特異化され、それ以外のナチズムによる虐殺行為と差異化されていること、そしてホロコーストが知識として比較的広く受容されていることがわかる。この種の知識は、歴史家によって発見された資料によって更新され、それがニュースによって報じられ、一般の人々の常識的な知識として定着することもある。

ただし常識的な知識の場合には、とりわけ近年、映画やテレビなどのマス・メディアによってドラマ化されることで、知識が物語化され、社会に普及していくケースも多々見られる。マス・メディアは、専門的知識を常識的知識に転換することで、知識の社会的普及に多大に貢献するが、それが既存の物語を再生産し、ステレオタイプを助長する役割をも担うケースも数多く存在するのである。アメリカの放送局ＮＢＣが作成した連続テレビ映画『ホロコースト』（一九七九年）、そしてスピルバーグ監督による映画『シンドラーのリスト』（一九九三年）などはその典型的な例であろう。

このように、ホロコーストのような歴史的出来事をも含む社会的出来事に関する常識的な知識が、専門的な知識を基盤としながらも、時にはマス・メディアを介して構築されることもある。その過程は、前述した「意味の体系」としての制度が生産、ないしは再生産される過程に対応している。前述したように、そこではホロコース

トに関する知識が、他の虐殺とともに類型化されると同時に、他の虐殺とは差異化され、さらには特異化されるという作用が働いており、それが「知識の制度化」の重要な構成要素となっている（バーガー＝ルックマン［一九六六＝一九七七］、九三―九四頁、参照）。

（3）イデオロギーとしての歴史的知識

知識は客観的な装いを凝らすことで、説得力と有効性を高める。しかし、これまで論じてきたように、知識は社会的に動員され、活用される中で、とりわけ制度化される過程で、一定の価値観に基づいて編集され、社会的に機能する。換言すると、知識は一定の社会的文脈の中で機能することで社会的影響力を持ちうるのである。特に近代社会では、専門的知識はマス・メディアを介して常識的知識へと転化することで、一般の人々による状況の定義づけや意味づけに寄与することから、この傾向が顕著に生じると言える。この点に関しては次の指摘が有用である。

「社会的な知識の中には、ある集団のイデオロギー的立場や権力として作用するものもある。そうした作用が生じるのは、知識が集団それ自身の社会的立場に属する場合、また集団のイデオロギー的見解を明確にする社会問題と関連する場合である。」（van Dijk［1998］, p111）

こうした知識の特質は、知識が主に言葉によって語られ、構成されることから生じると言える。なぜなら、前述したように、言葉はそれが社会的に使用される場面では権力作用が伴うからである。この言葉の権力作用という観点を媒介として、イデオロギーとしての知識という見解が導かれることになる。この点に関しては、言語の政治的機能に焦点をあわせて論議を進めたミューラーの次のような説明が参考になる。

「（イデオロギーとは：引用者）政治的現実に対して説明を与え、階級や集団の集合目標を確立するような統合的な信

念体系を意味する。そしてそのイデオロギーが、ある社会の支配的なイデオロギーである場合には、それは社会全体の集合目標を確定していく」（ミューラー［一九七五＝一九七八］、一三二頁）。

知識との関連からここで注目すべきは、イデオロギーが「政治的現実に対して説明を与える」役割を担っていると述べられている点である。なぜなら、ある事象について説明を行い、意味づけするにあたり、その根拠になり、動員されるのものを知識と見なすことができ、そこからイデオロギーとしての知識という見解を導くことができるからである。また、ここで言う政治的現実とは、字義通りの意味ではなく、現代的文脈において社会的に浮上した歴史的出来事も含まれうる。マス・メディアは、政治的現実のみならず歴史的出来事に関して説明することも多々あるが、その際には、常識的な知識、あるいは支配的価値観が常に参照される。そこにマス・メディアの現状維持機能が見てとれるのであり、その点については、すでに多くの（マス・）コミュニケーション研究者、なかでも批判的コミュニケーション研究者が論じてきたのは周知の通りである。

そこで次に、知識のなかでも歴史的知識に的を絞り、イデオロギーとしての歴史的知識という観点から集合的記憶の問題と関連させながら論じることにしたい。ホロコーストをめぐっては、ドイツ国内においてもこれまで深刻な論争が生じてきた。例えば、歴史学者のノルテは、歴史的出来事としてのホロコーストの相対化を図る中で、近代史においてこの出来事が占めてきた絶対的地位と、それ故に生じる歴史観の歪みに言及した。とくにロシア革命以降、第二次世界大戦以前においてソビエトで生じた富裕農民層に対する虐殺とホロコーストを対比させながら、次のように論じた。

「アウシュヴィッツは、何はさておき伝来の反ユダヤ主義から結果したのではないし、その核心においてたんなる『民族虐殺』ではない。そこで問題になるのは、とりわけロシア革命のさまざまな抹殺事件に対する、不安から生まれた反動なのである。……第三帝国時代のいわゆるユダヤ人の根絶が、ひとつの反作用ないしは歪んだコピーであって、

初めて生じた事件ないしはオリジナルではない……。」（E・ノルテ［一九八七＝一九九五］、三〇―三一頁）

確かに、ホロコーストを引き起こした原因に関しては、ナチズム以外の原因、例えば（ノルテは明確に否定しているが）キリスト教徒の間に長年にわたって蓄積された反ユダヤ主義、あるいはナチズム以前の時代に広く存在したドイツ国内のユダヤ人に対する偏見などを指摘する見解も存在する。これらの主張によれば、ホロコーストが生じる土壌がすでに存在し、ナチズムはホロコーストの引き金にすぎないということになる。それに関連して、ホロコーストが行われていることを認識していたにもかかわらず、その問題を積極的に取り上げようとしなかった連合国側、特に当時のイギリスやアメリカの政治的指導者を告発する研究者もいる（例えば、ブライトマン［一九九八＝二〇〇〇］、参照）。

このように歴史家など専門家によって提起された見解とそれに対する反論、発掘された資料、そして新たに収録された証言などを通じて、さらにはそれらを契機に生じた論争によって、ホロコーストに関する専門的知識は再生産ないしは更新されてきたと言える。そして、前述したように、それらの専門的知識は、例えばマス・メディアが介在することで常識的な知識へと拡張されてきた。専門的知識はその過程では再編集され、その中で社会的な記憶が生成されてきたのである。

（4）集合的記憶と集合的アイデンティティ

本稿で主たる分析対象とする、イギリスのホロコースト・メモリアル・デイの式典は、ホロコーストに関する歴史的かつ専門的知識を基盤としながらも、後述するように、常識的な知識に沿いながら国家イベント、ないしはメディア・イベントとして挙行された。換言すると、ホロコーストに関する常識的な知識は、この式典を通じて社会的に表面化し、社会的かつ集合的な記憶が再生産されることにより活性化したと捉えられる。ここでもま

た、専門的、常識的を問わず、知識は一定の価値観やイデオロギーの観点から編集され、枠づけられ、社会の構成員によって共有されている。そこで以下では、イデオロギーとしての知識が活性化するメカニズムに関して、集合的アイデンティティの問題と関連させながら、社会的かつ集合的記憶に関する研究を参照しながら検討してみる。

想起される集合的記憶

記憶の問題を個人レベルから集合的レベルへと引き上げ、集合的記憶の問題について興味深い観点を提示し、多くの関心を集めたのがアルヴァックスの見解、およびそれから展開されてきた関連の諸研究である。ただし、記憶という概念は、かつては心理学、社会心理学などの研究領域を中心に、個人の情報処理（特に蓄積）過程との関連で研究されるのが一般的であった。その一方、集合的記憶に関する諸研究は、アルヴァックスが「個人的記憶＝自伝的記憶」と、「社会的記憶＝歴史的記憶」とを区別したように、両者の関連を問題にするものの、社会的かつ集合的に生成される記憶の想起や再生産の過程に焦点を合わせてきた。アルヴァックスの集合的記憶論に関して、浜は次のように適切に整理している（浜［二〇〇〇］、六―一〇頁、アルヴァックス［一九五〇＝一九八九］）。

① 集合的記憶の概念は、個人は集団の成員として過去を想起するという命題として要約することができる。われわれはお互いの記憶を参照し合いながら、実際に共同で過去の出来事を想起する。

② 集団の観点に立って想起するということは、単にその集団の成員として過去を想起するというだけではない。それは同時に、想起の時点でその集団において利用可能な「記憶の枠組」を用いて過去を再構成するということである。

③　歴史は「あるがままの事実の全体の系列」として過去のうちにあるのではなく、現在の集団の布置のうちに見出されるべきものである。

また、アメリカ社会におけるホロコーストと集合的記憶の問題について考察を加えたノーヴィックは、歴史的出来事の単純化と現在化という作用を集合的記憶の特質として掲げ、アルヴァックスの見解を参照しながら次のように論じている。

「アルヴァックスは、集合的記憶という用語をたんにある集団によって共有される歴史的知識という意味では用いなかった。集合的記憶とは、実際には非歴史的、さらには反歴史的という重大な意味を持っているのである。歴史的に何かを理解するということは、その出来事の複雑さを知り、十分な距離を置いて多様な視点からその出来事を眺め、その出来事の当事者の動機や行動に関して、倫理的な問題も含めその出来事の曖昧さを受け容れることである。その一方、集合的記憶は、出来事を単純化する。すなわち、いかなる曖昧さにも耐えられず、出来事を神話的な型にはめ込んでしまうのである。……記憶は、時間が経過したという感覚を持たない。記憶は対象となる出来事が『過去に起きた』ことを否定し、その出来事が現在も継続していると主張する。」(Novick [1999], pp. 3-4)

ノーヴィックは、集合的記憶を出来事の単純化、すなわち「型にはめる」作用として捉え、出来事の客観的把握を志向する理解という行為と対照させている。ここで言う、「出来事の単純化」という集合的記憶の特徴は、例えばマス・メディア報道の特質とも言える出来事の物語化、例えば善悪の二項対立図式による出来事の枠づけという作用と対応している。この点に、集合的記憶の想起や再生産の過程におけるマス・メディアの役割を見出すのは容易である。また、「出来事の現在化」というのは、現在生じている社会的な問題や争点さらには紛争が、「制度化された知識」に基づいて、他の歴史的出来事と類似していることが想起され、それと関連づけられるメカニズムを指し示す。この場合にも、マス・メディアは歴史的出来事に関する既存の物語を活用することで、そ

うした問題、争点、そして紛争の意味づけや定義づけを行う際、中枢的役割を担う。それこそが集合的記憶の現在化という作用であり、この過程で集合的記憶が生成され、動員されると捉えられる。

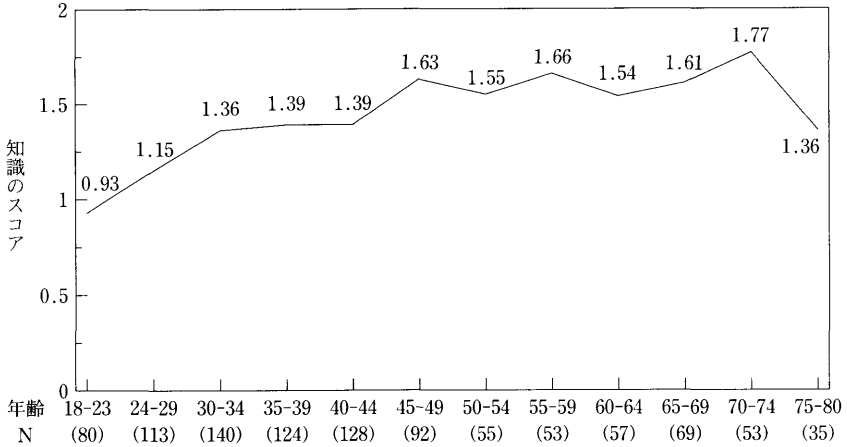
アメリカ社会におけるホロコーストの記憶

このように、集合的記憶ないしは歴史的出来事の想起に関する研究は、アルヴァックスの見解を出発点に、いくつかの修正は施されてきたものの、かなりの程度普及してきた。また、この種の研究傾向は、社会心理学の集合的記憶に関する調査研究にも影響を及ぼすようになってきた。そこでは言葉の役割を重視する研究もある。例えば、ペニベーカーらは、言葉が集合的記憶に対して及ぼす影響について、「言葉によって出来事を想起するという行為は、記憶を組織化し、おそらくは将来出来事を思い出す方法にまで影響を及ぼしうる」（Pennebaker and Banasik [1997], p. 7）と述べる。ペニベーカーらは、この種の研究領域でそれまで主流であった実験室調査ではなく、電話調査や面接調査などの手法を用いて、近代史における主要な政治的出来事に関するアメリカ社会の記憶の問題について調査を実施した。そして、集合的記憶の構築と維持に関する調査結果を次のように要約している（*ibid*, p. 17）。

① 人々の生活に対して重大かつ長期的な変化を与えた出来事に関しては、集合的記憶が形成され、維持される可能性がきわめて高くなる。

② 人々が非常に積極的に話題にし、思考する出来事に関しては、集合的記憶が形成される可能性が非常に高くなる。

③ 出来事の中には、人々が話題にすることを負担に感じ、強く避けるものもあるが、それらについては、人々が思考し、思いをめぐらすことが多くなるので、そのぶんその出来事の影響度は強まる傾向がある。



出典：Schuman, H. et. al. [1997], p. 59, Fig. 3.4より作成

図1　ホロコーストに関する知識

④ 集合的な心理的インパクトを与える出来事は、集合的な行動を引き起こす傾向がある。

⑤ 国家規模の主要な出来事は、世代に応じてかなり異なる様式で人々に影響を与える傾向がある。

⑥ 人々は、二〇―三〇年の周期で過去の出来事を思い返し、それを後世に伝える傾向がある。

この調査では、ホロコーストも調査対象となる歴史的出来事と一つにあげられていた。ここではホロコーストに関する集合的記憶について、アメリカ社会を対象に検討するが、その前に「ホロコーストのアメリカ化」という問題について若干論じることにする。ホロコーストという歴史的出来事は、その悲惨さからグローバルなレベルでの集合的記憶として位置づけられるが、同時にホロコーストがアメリカ社会の中で積極的に語られ、それが他の社会に輸出されてきたという側面を有する。それが、ここで言う「ホロコーストのアメリカ化」という傾向である。その背景には、アメリカ社会におけるユダヤ系アメリカ人の社会的影響力の大きさ、そしてアメリカ社会の国際的な影響力の強大さが存在するのは言うまでもない。

実際、前掲の調査の中で、シューマンらは一九九〇年代はじめに社会調査を実施し、ホロコーストをはじめアメリカ政治史に深くかかわる一〇の出来事（マッカーシー事件、ベトナム戦争におけるテト攻勢、ウォーターゲート事件など）を取り上げ、それらについてアメリカ国民が有する基本的な知識の程度を比較した。その結果、ホロコーストに関する知識の程度はかなり高いことが示された。また、その知識の程度は、他の出来事と比べ、年齢、教育程度、性差、人種、いずれの要因によっても大きく左右されないことも示された。さらにこの調査結果では、調査実施当時、七〇―七四歳の人々が二〇歳の頃アウシュヴィッツの記事や写真に接し、四五―六九歳の人々は青年期にホロコーストに関する衝撃的な解説に接し、若干知識の程度が低い四〇代前半以下の層の人々も「シンドラーのリスト」などを通してこの出来事に関する知識を有するようになったことが指摘されている（Schuman et.al. [1997], pp. 49-52, 59-60：図1）。

このようにシューマンらは、ホロコーストが他国で生じた歴史的出来事であるにもかかわらず、知識の程度に関して年齢差があまりないことを強調する。アルヴァックスは、前述のように二〇―三〇年の周期で集合的記憶は再生産されると述べたが、この調査によれば、ホロコーストに関してはアメリカ社会ではより短い周期で再生産されてきた。その結果、ホロコーストに関する知識に関しては世代間格差があまり拡大してこなかったのである。この点については、次のように述べられている。

「（ホロコーストに関する：引用者）これらの調査結果は、本稿で検討してきた他の出来事とは異なる。……なぜなら、この出来事に関して重要なのは、ホロコーストが実際に生じた時期ではなく、それが一般の人々に知られた時期だからである。従ってホロコーストは、出来事に関する経験が多世代に渡るという、特異な例の代表である。」（*ibid*, p. 60）

アメリカ系ユダヤ人コミュニティにとってのホロコースト

また、「ホロコーストのアメリカ化」と集合的記憶の関連について検討する際、忘れてならないのはユダヤ系アメリカ人の存在である。周知のように第二世界大戦開戦当時にすでに、かなり高い経済的・社会的地位を得たアメリカ系ユダヤ人も多数いたが、彼らもまた他の少数民族と同様に様々な偏見や差別を受けていた。しかし、この状況は以下の記述にあるように終戦当時に大きく変化した。

「一九四四年の世論調査では、回答者のほぼ四分の一がアメリカに対する脅威としてユダヤ人をあげた（例えば、それは金権勢力やボルシェヴィキというイメージによる）。終戦間近、ナチの強制収容所の恐怖がしだいに漏れ聞こえてきはじめ、世界を慄然とさせるようになって、はじめて世論の動向に決定的な変化が生じた。……アメリカ文化がユダヤ人を受容する傾向を増していく一方で、ユダヤ人の方は完全なアメリカ化の傾向を辿るようになった。一九五〇年代までに、アメリカ人のユダヤ人の四分の三は、アメリカ生まれとなり、彼らのほとんどは少なくとも第三世代のアメリカ人となった。」（ハイアム［一九八四＝一九九四］、一八八―一八九頁、一九一頁、ただしカッコ内は一八四頁）

このようにユダヤ系アメリカ人は、アメリカ社会への同化を進めていくと同時に、ユダヤ人としての集合的アイデンティティを次第に弱めていった。しかしながら、ハイアムのこの指摘にもあるように、ホロコーストという出来事がアメリカ国民のユダヤ人に対するイメージを変化させた一方で、ホロコーストに関する記憶がユダヤ人の集合的アイデンティティ形成の拠り所として機能した側面も有していた点は注目すべきであろう。ちなみに、ここで言う集合的アイデンティティとは、「行為者が共通の認知枠組みを生み出す過程であり、それによって行為者は環境を査定し、その行為の損得を計算できるようになる。彼らが形成する諸定義は、相互交渉や互いに影響し合った結果であるし、感情的な認識の結果でもある」（メルッチ［一九八九＝一九九七］、三〇頁、一部訳語を変更）という定義によっている。また、こうした集合的アイデンティティの形成過程においては、無論、心理的な境界としての「われわれ」意識が生じ、包摂と排除のメカニズムが作動する。ノーヴィックは、アメリカ社会へ

の同化が進むユダヤ系アメリカ人の人々の中で、ホロコーストに関する集合的記憶が果たしてきた役割について次のように明快に述べている。

「……集合的アイデンティティと集合的記憶との間には、循環的な関係がある。我々は、ある一定の記憶を選択し、それを中心に据える。というのも、その記憶は、我々の集合的アイデンティティの中心に位置するものを表現すると考えられるからである。これらの記憶がいったん前面に出ると、集合的アイデンティティは強化される。そのことは、ホロコーストとユダヤ系アメリカ人との関係にもあてはまる。ホロコーストは、二〇世紀後半には、実際、ユダヤ系アメリカ人の唯一共通の表象（denominator）となった。また、彼らは合意を得られるシンボルを欲していたが、ホロコーストはその欲求も満たすことになった。ユダヤ系アメリカ人は、アメリカ社会への同化や他民族との通婚率の上昇により宗教面での衰退が進み、それらすべてが民族の消滅を招くのではという脅威に直面していた。その中で、『ユダヤ人の存続』に対する危惧が高まっていった。そうした不安に対処するために、ホロコーストはユダヤ系アメリカ人の象徴として巧みに描かれたのである。」（Novick［1999］, p. 7）

この見解にあるように、意図的か否かは別にして、ホロコーストに関する集合的記憶は、（ホロコーストに関する様々な論争も含め）ユダヤ系アメリカ人の集合的アイデンティンティの再生産に寄与してきたと見ることができよう。加えて、ホロコーストに関する集合的記憶のこの種の作用は、決してユダヤ系アメリカ人に限定されずに、世界のユダヤ人たち、特にイスラエル社会の集合的アイデンティティにとって重要な意義を有していたことも指摘されている（Novick［1999］, p. 278）。このように、集合的アイデンティティの再生産過程と、ホロコーストをめぐる集合的記憶の想起は密接に連関してきたのである。

（5） 集合的記憶の制度化

ホロコーストのようなきわめて衝撃度が大きい歴史的出来事にまつわる集合的記憶について検討する場合には、

たとえアメリカ社会に限定して論じるにしても、ユダヤ系アメリカ人のみに焦点を合わせるのは適切ではないのは当然である。というのも、ユダヤ系アメリカ人のアイデンティティについては、彼らのアメリカ社会への同化という傾向を考えるならば、ユダヤ人コミュニティに収斂されるものではなく、この出来事に関するアメリカ社会全体の動向と密接にかかわるからである。アメリカ社会では、前述したように、ホロコーストに関する証言や資料が公になり、それに応じて集合的記憶が段階的に更新されてきたとも捉えられるが、その一方で、ノーヴィックも指摘するように、「ホロコーストに関する認識は、イスラム社会に包囲されたイスラエルに対する支持を動員するために増大させられた」（Novick［1999］, pp. 268-269）という側面にも留意する必要がある。後者の指摘は、言うまでもなく中東地域の紛争とホロコーストに関する集合的記憶が連動していることを示唆するものである。

こうしたアメリカ社会の動きを背景として、ホロコーストをめぐる記憶の制度化は進展してきた。その象徴的出来事が、一九八〇年一〇月、当時のカーター政権によって立法化された「ホロコースト・メモリアル委員会（the United States Holocaust Memorial Council）」の設置である（Public Law 96-388）。この法律では、この委員会は次のような活動を行うことが定められている。

① ホロコーストの悲劇を後世に伝えるために、毎年、国家規模で国民が犠牲者を追悼する記念日を定める適切な手法を国民に提示する。また、アメリカ全土でこの追悼日に適した式典が行われることを奨励し、支援する（第一項）。

② ホロコーストの犠牲者を追悼することを目的とした記念館を建設するための活動計画し、推進し、監督する。それは内務省などの政府機関と協同して行う（第二項）。

アメリカではこの法律をもとに、ホロコースト・メモリアル・デイが定められた。ただし、この追悼の日は、ヘブライ暦によっているため、キリスト暦では毎年その日は変わることになっている。また、国会で挙行される国家儀式は、ホロコースト記念館が主催する一方、各々の州は独自に追悼の日と追悼儀式の内容を決めることが定められている（「ホロコースト教育のための国際協力委員会」ホームページ資料）。そして、一九九三年にはホロコースト記念館がワシントン市で開館した。この記念館は、ホロコーストに関する知識や集合的記憶の中心となる建物であり、連邦政府から財政援助も行われてきた。それ以外にも、ロサンゼルス、ボストン、ヒューストンなどにも同種の記念館が建てられ、そこでは常設展示が行われる一方、ホロコースト・メモリアル・デイには様々な式典が催されている。

アメリカではこのように、ホロコーストに関する集合的記憶は、記念館という公的な建物やそこでの展示物を通して常に社会的に表現されている。それらは、集合的記憶を想起する装置である。また、この種の記念館はホロコースト教育やホロコースト研究の拠点にもなっている。言うなれば、ホロコーストに関する集合的記憶は、このようにして場所的・空間的に制度化されてきたのである。加えて、ホロコースト・メモリアル・デイを定めることにより、やはりこの種の記憶は時間的に制度化されてきたと言える。こうした制度化は、いくつかの州で学校の授業でホロコーストについて教えることを州法で定め、また講義でホロコーストの講座を設ける大学があることからわかるように、教育の場でも進められてきた（Novick［1999］, p. 277）。

これらの集合的社会の制度化は、アメリカに限られたものではなく、世界各国に広がっており、法制化されているか否かは別として、ホロコースト・メモリアル・デイを定めている国はアメリカを含め四〇カ国にも達している（「ホロコースト教育のための国際協力委員会」ホームページ資料）。

（6）記憶される場所とメディア権力の隠れた次元

これまで述べてきたように、ホロコーストの記憶の制度化は、アメリカ社会では記念日という時間、記念館という場所、そして公教育という主に三つの局面で進められてきた。ただし忘れてはならないのは、アメリカ社会のみならず、他の社会においても、これらの記憶の制度化という営みが、ホロコーストの起きた現場、特にポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所と関連づけられてきたという事実である。また、オランダにあるアンネ・フランク・ハウスは、アウシュヴィッツとともにホロコーストの集合的記憶にとって象徴的な場所であり、記憶の制度化を構成する不可欠な要素となっている。

場所の権力作用

そこで以下では、集合的記憶と場所の関係、そしてその際に働く権力作用について若干の検討を行ってみたい。レルフは場所の有する社会的意味に関して考察を加え、場所を構成する要素として「静的な物質的要素」「人間の活動」「意味」の三つをあげている（レルフ［一九七六＝一九九九］、一二三―一二四頁）。第二次世界大戦後、アウシュヴィッツやアンネ・フランク・ハウスは、ホロコーストという出来事にとって、いわば「巡礼の場所」となり、そこを訪問する人々にとっては、概してホロコーストに関する集合的記憶を想起するという、非日常的な経験をする場所である。レルフの指摘によれば、強制収容所の建物や展示物が「静的な物質的要素」にあたり、そこでホロコーストの悲惨さが伝えられる。そして、それを訪問者が受容するという行動が「人間の活動」にあたる。さらには、この場所はホロコーストの犠牲者に対する同情や追悼という感情、さらにはナチズムの残虐性に対する批判や非難という「意味」に満ちているのである。

レルフは、場所の持つ機能について「実際、出来事や行動は特定の場所を背景としてのみ意味をもち、そしてちょうどそれらが場所の特性に寄与するように、それらは場所の特性によって彩られ、影響される。……場所はこのように、すべての人間の意識と体験の意志的構造に組み込まれている」（同、一一二―一一三頁）と述べている。アウシュヴィッツ博物館（正式名称はアウシュヴィッツ・ビルケナウ国立博物館）は、終戦間もない一九四七年七月にポーランド議会で定められた法律に則って建設された。その後何度かの拡充・整備工事を経て、現在のような姿になっている。また、アンネ・フランク・ハウスは、一九六〇年に開館した。再度レルフの言葉を借りるならば、これらの場所が、ホロコーストという出来事や行動を記憶するための特定の場所として保存・整備され、ホロコーストに関する意識と体験の意志的構造を成立させているわけである。

レルフはまた、こうした特質を有する場所とアイデンティティとの関連について論じる中で、「アイデンティティは、個々の人間や物体と、それらが所属する文化の両方に基礎をおいている。それは静的で不変なものではなく、状況や心情の変化とともに変化する」と述べた後、「……重要なのは場所のアイデンティティだけではなく、個人や集団がその場所に対して持つアイデンティティ」であると結論づける（同、一二〇―一二一頁）。

ホロコーストに関する集合的な記憶を制度化するために、アウシュヴィッツやアンネ・フランク・ハウスといった、その種の記憶を象徴する場所を保存し、あるいは再建・復興し、展示物を備え、巡礼の地とし、さらにはこの出来事の研究拠点とするという一連の方策が打ち出され、実行されてきた。それらの方策は、ホロコーストという出来事やそれにまつわる場所に対する個人や集団の価値観を育成し、それを通じてアイデンティティを形成するのに大いに寄与してきたと言えよう。

もちろん、アウシュヴィッツやアンネ・フランク・ハウスという場所に対するアイデンティティは、ホロコーストに関する知識が増大し、変化する中で、あるいは記憶が制度化される過程で変化してきた。ただし、それら

の場所に対するアイデンティティは、無論、個人や集団に応じて異なっており、きわめて多様かつ多層的なのは当然である。そうしたアイデンティティは、例えばイスラエル国民、ユダヤ民族といった単位で形成ないしは再生産されてきた。それらは、国民国家ないしは民族・宗教の単位で、ナショナリズムと密接に関連するものである。さらには、それよりはるかに広範かつ曖昧な集団に帰属するというアイデンティティも形成されてきた。それは例えば、反ホロコースト、反ナチズムという価値観を共有し、同時に民主主義体制に信頼を置き、その種の社会に所属する（あるいは所属したいと願う）価値観を基盤として生じるアイデンティティが相当するであろう。

メディアの現場とメディア権力

こうしたアイデンティティの形成や再生産過程に、マス・メディアを中心とする諸メディアが深くかかわってきたことは重要である。というのも、メディアによって伝えられる情報が、ホロコーストに関する集合的な記憶を特定の集団や国家の中で生成し、さらにはそれらを超えて拡大することを可能にしてきたからである。加えて、この点は、メディアの社会的影響力を探るうえで、多くの示唆を与えてくれると同時に、場所の有する権力性に関して検討する際、興味深い視座を提供すると考えられるからである。

例えばクドリィは、メディア、なかでもテレビによって放映された「メディアの現場（media location）」が有する権力性、およびそこで働く権力について考察するために、既存研究を参照しながら「メディア権力（media power）」という概念を提示する。メディア権力とは、「メディア制度の中で集中的に行われている、（事実の表象と説得力のあるフィクションを通じての）『現実の構築』という社会過程」（Couldry［2000］, p. 4）を指す。そして、メディア権力について検証するために、「メディアの現場」を訪れる人々を対象にインタビュー調査を実施した（事例として採り上げられたのは、テレビの人気ドラマが撮影された現場と、抗議運動が生じそれが報道された現場の二

つの場所である）。この調査の実施理由としては、これまでのメディア研究では、「舞台装置化されたメディア・イベントの儀礼的側面に関する研究はかなり増大してきたが、重要度がきわめて高いメディアの現場の訪問者についての研究は行われてこなかった」（*ibid*, p. 33）点があげられている。ここで言う「メディアの現場」とは、「放映されたその場所を視聴者が直接見るか、その場に立つことで）まさに「再埋め込み（reembedding）」が行われる場所である。その場所において、視聴者はスクリーン上の画像の背後に何か存在することを確信できる」（*ibid*, p. 34）場所である。なお、ここで言う「再埋め込み」とは、時空間の拡大と時間と空間の分離が進んだ近代社会において、いったん局所的な脈絡から引き離された社会関係（脱埋め込み：deembedding）が、時空間的に限定された状況の中で再構築されることを指す（ギデンズ［一九九〇＝一九九三］）。

クドリィのメディア権力論の中心を占める、「現実の構築」という社会過程の有する権力作用に関しては、これまでは疑似環境論（リップマン）やシミュレーション論（ボードリヤール）などに依拠しながら論じられることが多かった。すなわち、映像メディアを中心とする様々な現代のメディアが作り出す情報環境（＝疑似環境）が、人々が直接に接触する環境（＝直接的環境）よりも優位に立つ、あるいは疑似環境が直接的環境を浸食するという「疑似環境の環境化」（藤竹暁）という考え方が支配的であった。クドリィは、疑似環境論などの重要性は認めつつも、それらが経験的な検証を十分に行っていないことを批判し、「メディアの現場」に注目して、そこを訪問する人々とメディアの現場との間に生じる新たな境界の存在に注目する。なぜなら、メディアの現場を訪問する人々は、一般の視聴者とは異なり、「メディア世界」と「日常世界」との境界を物理的に越えていると考えられるからである。こうした観点からクドリィは、メディアの現場の有する権力作用を中心に据えながら、また象徴権力（ブルデュー）の概念を参照しつつ、「自然な適合（naturalize）」というキーワードを用いて、メディアの権力作用について次のように要約している。

「以下に示す三つの作用は（名づけ＝naming, 枠づけ＝framing, 秩序化＝ordering：引用者）、協働することにより、メディアの集中化した象徴権力を社会に自然に適合させるのに役立っている。まず、メディアは、社会的現実に関する「事実」の報告者としての地位が与えられている（名づけ）。メディアのそうした地位により、そこで報じられる「事実」は、我々が社会的現実に接近する際の「枠づけ」として、より一層社会に適合するようになる。そのことはまた、「メディア世界」と「日常世界」との間の象徴的な階層を強化するのに役立つ（秩序化）。さらに、そうした秩序化は、社会的「現実」、ないしは社会的「実在」として（それが事実であれ、フィクションであれ）メディアが扱う素材の地位を強化するのに役立つ（再度の名づけ）。このような再生産を行う大規模で閉鎖的な循環構造が存在し、その結果全体が「メディアの枠組みという象徴的な階層」を構成しているのである。」（Couldry [2000], p. 52）

そして、この象徴的階層は、以下の二つの傾向によって強化されることも指摘されている（*ibid*, pp. 52-57）。その傾向とは、第一に、メディアの受け手がメディア情報の生産技能を持たず、メディア生産過程に直接かかわることができないという特徴から生じる、メディア情報の生産者（＝送り手）と受け手との間の「距離の増大（spacing）」である。第二は、メディアの中ではそうした消費者の日常が描かれているが、メディアに登場する人物や集団に関してはメディアの中に登場するが故に「特殊である」と考えることから生じる、受け手の側の矛盾をはらんだ「イメージ化（imaging）」である。

以上の指摘が、「マス・メディアは社会的な問題、人物、組織、および社会的活動に地位を付与する」、「マス・メディアは、個人や集団の地位を正当化し、それによって彼らに威信を与え、彼らの権威を高める」（ラザースフェルド＝マートン［一九六〇＝一九六八］、二七六―二七七頁）という、従来から論じられてきたマス・メディアの地位付与機能に関する研究と関連し、その延長線上にあるのは明らかである。しかしクドリィは、そうした地位付与のメカニズムに関して、名づけ、枠づけ、秩序化、さらには距離の増大、イメージ化といった用語・概念を用いて詳細に説明し、その種のメディアの権力作用が社会に自然に適合している過程を強調する。ここで

のメディア権力論は、オリジナルとコピーを対比させ、オリジナルの本質性を強調し、コピーによって支配される社会を批判するというものではない。クドリィのメディア権力論は、メディアの現場を素材にして、メディア世界と日常世界との間にある境界の存在、および両者の階層性、すなわちメディア世界の優位性に焦点を合わせるものである。

記念館の有する権力性

次に、クドリィのメディア権力に関するこうした見解を、ホロコーストという歴史的出来事の現場に適用してみる。例えば、アウシュヴィッツやアンネ・フランク・ハウスといった場所は、ニュースやドキュメンタリー番組、そして映画や写真集などの書物を通じてメディアの現場となり、その影響もあって巡礼の地として広く知られている。こうしたメディアの現場を訪れた人々は、保存ないしは復興された設備や建物、そして一定の価値観に基づいて編集された展示物と出会うことになる。これらの人々は、メディアの現場と日常生活との境界を越えている。そして、ホロコーストに関して何らかの知識を持っている場合には、以下のような感覚を持ってメディアの現場に入り込むことになる。

「場所に対する感覚は、実際、その場所で強化される。というのも、そこではメディアのメカニズムそれ自体が存在し、人々はメディアの生産過程を目撃することができるからであり、あるいはその過程を自分が目撃しているとイメージできるからである」(Couldry [2000], p. 30)。

それでは、このクドリィの見解を発展させて、アメリカのホロコースト記念館など、出来事が起きた現場ではなく、その出来事を伝えるために作られた建物を訪れ、そこにある展示物を見学する人々については、どのように考えられるであろうか。第一に、強制収容所で虐殺された人々の持ち物や写真などの展示物、そして体験者の

証言ビデオなどが、歴史的出来事が生じた現場の代替機能を果たしうることが指摘できる。第二に、その建物やそこで行われるホロコースト・メモリアル・デイの式典などのイベントがマス・メディアで報道されることにより、その場所がメディアの現場へと転化する。その結果、その種の建物を訪問する人々は、やはり自分とメディアとの境界を越えると考えるのである。

メディアの現場を訪れるこれらの人々は、概して、マス・メディアの枠組みがより強く付与され、再埋め込みが行われる。すなわち、ホロコーストと名づけられた出来事に関して、既存の支配的な知識が動員され、集合的な記憶が想起され、社会化の過程で獲得した価値観による再度の名づけと枠づけが行われるのである。その過程はまた、メディアにおけるホロコーストの描写を再確認することである。それは、ホロコーストの描写の正当性とメディアの影響力の大きさを再評価することを通じて、メディア世界と日常世界との間の象徴的階層の再秩序化が行われる過程でもある。

(7) 場所の物語と記憶をめぐる抗争

アンネ・フランク・ハウスの解説書（日本語版）の副題は、「ものがたり（story）のあるミュージアム」であり、その中には次のような記述がある。

「プリンセンフラハト二六三番地に足を踏み入れると、まるでタイムマシンのように一気に時代を遡ります。アンネの日記からの抜粋を通じて、当時その部屋でどのような生活が営まれていたかがわかるようになっています。その隠れ家の住人とその生活を支えた四人の協力者たちの遺品も展示されています。……今日、アンネのように他の人と『違う』だけでなく『違う』ことを『願っている』ために弾圧を受け生命を奪われている人々が後を絶えません。だからこそ、アンネ・フランク・ハウスを訪れることが我々の時代にも深い意義を持つのです。」（はじめに）

解説書のこの紹介文は、前述したように、この博物館でも様々な展示物が一つのストーリーとして意図的に配列され、それによって一定の価値観を持つ物語（narrative）が構成されていることを示している。そしてこの物語は、現代社会における民族・宗教・言語などによって生じる様々な社会的な排除や差別、そしてそうした排除や差別を生み出し、正当化する価値観を批判する意味も有している。なお、ここで用いる物語とは「すでに起こったこと、あるいはすでに起こったとみなされていることを、秩序づけ、秩序づけなおし、物語り、物語りなおす過程」という動態的な行為を指す（ミラー［一九九〇＝一九九四］、一五九頁）。この博物館はアンネ・フランクにまつわる物語を提示し、それによってホロコーストに関する集合的記憶を想起させ、それに関連する現代の社会問題に対する関心を喚起させるという役割を担う場所なのである。

アンネ・フランク・ハウスの象徴性

また、この博物館がホロコーストという出来事を象徴することから、マス・メディアによって報道されることで、先に述べたメディアの現場として権力が作用する場所となっている点も重要である。アンネ・フランクの場合、『アンネの日記』が一九四七年に出版され、その後多くの言語に翻訳され、世界的に大きな反響を呼んだことが、この場所を象徴化する契機になったことは見逃せない事実である。また、この日記が演劇や映画の素材となることで、アンネ・フランクとアンネ・フランク・ハウスはホロコーストの物語にとって不可欠な要素となった。マス・メディアと場所が互いにイメージを増幅するこうした過程について、レルフは次のように批判的に論じる。

「マス・メディアは、その受け手が直接には経験できない場所に、単純化され選択されたアイデンティティを都合よく与えて、偽りの場所の偽りの世界を作りあげようとする。そして、これらの寄せ集め的なアイデンティティとステレ

オタイプにさらされた者は、決まってそれらの見方で実際の場所を経験するようになる。」（レルフ［一九七六＝一九九九］、一四九―一五〇頁）

ただし、レルフが事例としてあげているのは、ワイキキやディズニーランドといったアメリカの行楽地である。アンネ・フランク・ハウスの解説書を見ると、この博物館が様々な展示物を通して主張しているのは、言うまでもなく「反ユダヤ主義、人種差別、人種偏見」の撲滅である（二四一頁）。そして現代社会では、そうした見解は共有されるべきと考えられ、それを世界規模で公認された理想・理念として見なすことは可能である。

とはいえ、マス・メディアによって取り上げられた場所において作用する権力のメカニズムに関しては、レルフの説明は有効だと言える。この種の権力作用に関連してレルフは、「異なる利害関係と知識を持つ集団や共同社会にとって、場所は異なるアイデンティティをもつ」（レルフ［一九七六＝一九九九］、一四八頁）と述べる。逆から見れば、異なるアイデンティティを持つ複数の集団は、歴史的出来事が生じた場所をめぐっては、現代社会の文脈の中に位置づけて、多様な解釈や記憶の想起を行うのである。例えば、アンネ・フランク・ハウスの解説書には、アンネ・フランクの像にネオナチの落書きが書かれた写真が載っている。西ヨーロッパのネオナチの集団は、偏狭な民族主義や人種偏見の立場から反ユダヤ主義や外国人労働者の排斥を主張しているが、この写真は記憶を想起する場所が同時に価値観の対立や紛争の場所になることを示している。

もちろん、こうしたネオナチの信念や行為は否定されるべきであるが、現代社会の文脈では、先に若干触れたように、反ユダヤ主義という問題はかなり複雑である。なぜなら、ユダヤ人国家としてのイスラエルは、言うまでもなく、パレスチナ問題など宗教・民族問題、さらには国際紛争の直接の当事者であり、現代社会の中で反ユダヤ主義を主張することが、こうした問題や紛争に関与するという見方も存在するからである。その場合、反ナチズムと同時に反ユダヤ主義の象徴として認識されているアウシュヴィッツやアンネ・フランク・ハウスは、歴

史的な記憶の場所にとどまらず、現代社会の文脈の中では、異なる利害関係と知識（あるいは集合的記憶）が対立し、抗争する場所と化するのである。

ホロコーストからの「脱適合」

クドリィは、前述したように、メディアの現場を訪問する人々に対してメディアの枠組みが「再埋め込み」される過程を描いたが、同時に彼らが「脱埋め込み」（ギデンズ）を行う過程についても言及している。例えば、「メディアで報じられた出来事を直接目撃した人々は、人々がメディアとの関係でかなりの程度脱埋め込みの状態になる」と論じ、その理由として「出来事を編集するという作業が、人々のメディアに対する信頼を喪失させる」（Couldry [2000], p. 135）点をあげる。クドリィはまた、前述した「自然な適合」と同時に、それとは逆の過程として「脱適合（de-naturalization）」という概念も提示する。ここで言う脱適合とは、メディア世界と日常世界との境界は認識しつつも、その階層性に対して疑問を持ち、メディア世界の優位性という「自然な適合」から脱する人々を指す。すなわち、メディアの現場における自らの経験に照らして、既存の支配的なステレオタイプに基づくメディア報道とは異なる見解を持ち、自然な適合から脱する過程が脱適合なのである（*ibid*, pp. 134-137、参照）。そして、この点に関しては次のような見解が示されている。

「……目撃者たちは、メディアの編集作業を技術的な過程としてではなく、より根本的な兆候と考える。編集作業が行われるというそれ自体の中に潜む事実が、メディアの（出来事をありのままに伝えるという）透明性に対する長期に渡って培ってきた信頼を崩すのである。もちろん、すべての人々が極端な形でこうしたショックを経験するわけではないが、このショックと無縁でいられる人はいない。」（カッコ内引用者：*Ibid*, p. 136）

このようにメディアの現場に居合わせた人々は、メディア報道に関して「これは現実である。しかし、これは

（どこか違う、メディアが介在する）現実である」（*ibid*, p. 150）ということを実感し、その結果認識のパラドックスに陥るのである。マス・メディア報道に必然的に伴う編集作業が、目撃者にとっての「現実」と、報道された「現実」との差異を生じさせ、そのことを実感した人々が脱適合を経験するのである。クドリィが挙げた目撃者というは、主に「新しい社会運動」の関与者であり、概して脱適合する傾向が高い人々だと言えよう。

ここで問題にしたいのは、クドリィの言う社会への適合、あるいは脱適合という現象が、必ずしもこれらの場所で生じるとは限らないという点である。一般の人々にとっては、これらの場所から空間的には離れた、集合的記憶の想起というイメージの世界の中で生じるのが一般的であろう。再埋め込みに関しては、マス・メディアが提示する反ホロコースト、反ナチズムの物語の中で行われる。確かに、例えば前述したホロコーストに関する書物、テレビ・ドラマ、映画、そして演劇を通じて実際再埋め込みが行われてきた。他方、このように再埋め込みが活性化する場所だからこそ、所与の知識とは異なる情報が、それが不正確であるにもかかわらず、論議を呼ぶケースも見られる。例えば、虐殺された人数などホロコーストの諸事実に関する疑問、そして『アンネの日記』が贋作であるといった見解が、これまでも一部のマス・メディアを通じて主張されてきた。これらの主張は、歴史的事実や知識の検証という側面のみならず、歴史認識や歴史的評価、さらにはそれに基づくアイデンティティの問題と関連して取り上げられ、多くの論議がなされてきたのは周知の通りである。

加えて、マス・コミュニケーションの受容過程では、マス・メディア報道を支配する枠組みとは異なる枠組みによって解釈され（＝脱適合）、その結果脱埋め込みという現象が生じることもある。周知のように、こうした理論・モデルは、近年のマス・コミュニケーション研究においてはメッセージの「多様な読み」の可能性を高く評価する立場から論じられてきた。もちろん、こうした多様性には階層性や支配性が必然的に伴う。ホロコーストの場合、「連合国側＝民主主義国家」対「日独伊＝ファシズム国家」という図式をもとに、「ナチズム＝虐殺

者」対「ユダヤ人＝被害者」という構図の中で、反ナチズムの観点からの読みが優位に立ってきた。ところが、虐殺されたユダヤ人が建国したイスラエルという国家が、数度の中東紛争において敵国となり、またパレスチナの人々に対して殺戮行為を繰り返してきたという認識は、とりわけイスラム社会の中では一般的と言われている。この図式に組み入れられた人々は、ホロコーストに関しては、欧米社会を中心に構築されてきた支配的価値観に基づく読みとは異なる読みを当然行うことになる。すなわち、支配的なメディア枠組みからの脱適合、ないしは脱埋め込みが行われるのである。サイードの以下の指摘は、この立場を象徴している。

「（親イスラエル、および反パレスチナ：引用者）キャンペーンをひじょうに効果的にしてきたものは、西欧がもっている自分たちの反ユダヤ主義に対する積年の罪悪感なのだ。この罪過を他の民族つまりアラブ人たちに肩代わりさせること以上に効率のいい手があるだろうか？　そうすれば、みずからを正当化できるだけでなく、中傷され迫害されてきたユダヤ人のために何かいいことをしたのだと救いを感じることができる。」（サイード［二〇〇一＝二〇〇二］、三頁）

このようにイスラム社会、ないしはアラブ社会にアイデンティティを持つ人々、すなわち、概して欧米社会を中心に想起される集合的記憶とは異なる記憶を有する人々は、欧米社会を中心に生産されるマス・メディア報道によって再埋め込みされる傾向は低いと言える。以上のことから、メディアの現場、そしてマス・メディアそれ自体では、様々な価値観が交錯・対立し、それがマス・コミュニケーションの多様な読みを促進していることが了解される。それは、現代世界で「常識」と化していると思われているホロコーストに関する集合的記憶に関しても例外ではないのである。

【引用文献・論文】

・アルヴァックス、M.［一九五〇＝一九八九］『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社。

・ギデンズ、A.［一九九〇＝一九九三］『近代とはいかなる時代か？』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房。
・クレムペラー、V.［一九四九＝一九七四］『第三帝国の言語』羽田洋ほか訳、法政大学出版局。
・サイード、E.［二〇〇一＝二〇〇二］『戦争とプロパガンダ』中野真紀子・早尾貴紀訳、みすず書房。
・盛山和夫［一九九五］『制度論の構図』創文社。
・ノルテ、E.［一九八七＝一九九五］「歴史伝説と修正主義のはざま？」徳永恂訳、J.ハーバーマス他著『過ぎ去ろうとしない過去』人文書院、九―三四頁。
・バーガー、P.L.＝ルックマン、T.［一九六六＝一九七七］『日常世界の構成』山口節郎訳、新曜社。
・ハイアム、J.［一九八四＝一九九四］『自由の女神のもとへ』斉藤眞他訳、平凡社。
・浜日出夫［二〇〇〇］「記憶のトポグラフィー」『三田社会学』第五号、四―一六頁。
・ブライトマン、R.［一九九八＝二〇〇〇］『封印されたホロコースト』川上洸訳、大月書店。
・マンハイム、K.［一九三八＝一九七一］『イデオロギーとユートピア（世界の名著56）』、高橋徹・徳永恂訳、中央公論社
・ミューラー、C.［一九七五＝一九七八］『政治と言語』辻村明・松村建生訳、東京創元社。
・ミラー、H.［一九九〇＝一九九四］「物語」利根川真紀訳、レントリッキア、F.＝マクローリン、T.編『現代批評理論』大橋洋一他訳平凡社、一四九―一八〇頁。
・メルッチ、A.［一九八九＝一九九七］『現在に生きる遊牧民』山之内靖他訳、岩波書店。
・ラザースフェルド、P.＝マートン、R.K.［一九六〇＝一九六八］「マス・コミュニケーション、大衆の趣味、組織的な社会行動」、シュラム、W.編『新版マス・コミュニケーション』東京創元社、二七〇―二九五頁。
・レルフ、E.［一九七六＝一九九九］『場所の現象学』高野岳彦他訳、ちくま学芸文庫。

・Bresheeth, H. et.al. [2000] *Introducing the Holocaust*, Icon Books UK.
・Couldry, N. [2000] *The Place of Media Power*, Routledge.
・Edelman, M. [1977] *Political Language*, Academic Press Inc..

- Novick, P. [1999] *The Holocaust and Collective Memory*, Bloomsbury Pub..
- van Dijk, T. [1998] *Ideology*, Sage Pub..
- Pennebaker, J.W. and Banasik, B.L. [1997] 'On the Creation and Maintenance of Collective memories' in Pennebaker, J.W. et.al. ed. *Collective Memory of Political Events*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 3-19.
- Schuman, H. et.al. [1997] 'The Generational Basis of Historical Knowledge' in Pennebaker, J.W. et.al. ed. *op. cit*. pp. 47-77.

- 「ホロコースト教育のための国際協力委員会」ホームページ
http://www.yadvashem.org.il/education/task/task-directory.html